

東京オリンピック と大渇水

～オリンピック大会までに、武蔵水路を完成せよ!～

たかさき てつろう
作家・高崎 哲郎



第三話「利根の水・東京へ、オリンピックに間に合った!?!」

<序>

「東京都の水飢饉^{ききん}を救済し隅田川浄化を目指して、利根川からの一部通水、荒川取水を約1か月繰り上げて8月25日に実施したい。」河野一郎^{こうの いちろう}オリンピック特命担当大臣は記者会見で断言した。オリンピックまでのカウントダウンが続く。この唐突の発言に、現場を預かる幹部技術者らは反発した。「8月25日の通水」は<ラクダが針の穴を通るよりも難しい>と聖書の言葉をもじって大臣発言に不快感をあらわにした。だが間近に迫った世紀の祭典は「大臣の暴言」としてすませるわけにはいかなかった。水資源開発公団^{みずしげん}（現水資源機構）や施工業者らは寝食を忘れ総力戦で難工事に立ち向かった。

東京オリンピックと大渇水～オリンピック大会までに、武蔵水路を完成せよ!～

「河野大臣、吠える」^ほ

首都東京は一向に慈雨に恵まれず、オリンピック開催が3か月後に迫った昭和39年（1964）7月、河野大臣は池田首相に相談することもなく、自ら主宰して「東京都水不足緊急対策会議」を総理官邸で開いた。大臣主宰の会議が総理官邸で開かれるのは異例なことだった。政府の水不足対策は河野大臣に一任されていたのである。建設・農林・通産など関係省庁（官庁名は当時）の局長や水資源開発公団副総裁、東京都水道局長らが出席した。会議の冒頭、河野大臣はまなじりを決して吠えた。

「利根川から東京に水をもってくる利根導水路はいつになったら通水するんだ。すべてがオリンピックなんだ。工事を前倒して工期を短縮しろ。作業員を増やせ。建設省の小西技監、どうなんだ!」

小西則良技監は答えた。

「若干なら工期の短縮は可能かもしれませんが、技術には無理ということは絶対にできません。無理をすれば必ず仕返しがあります。大臣。一度作った構造物は半世紀はもたせなければなりません」

河野は聞く耳を持たず、追い打ちをかけた。

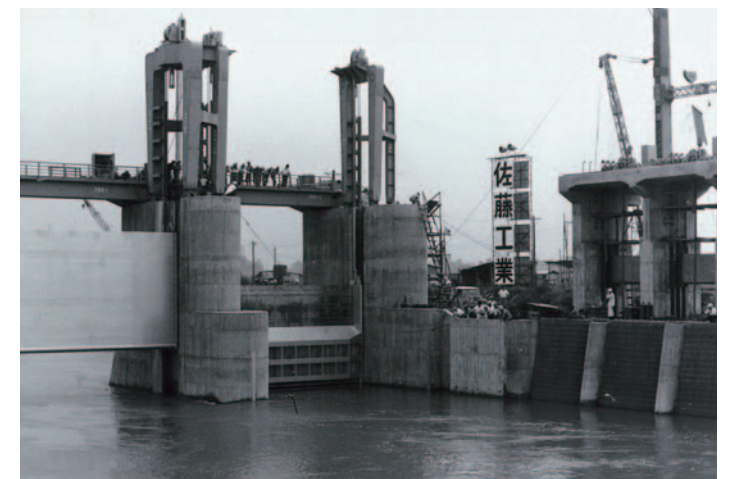
「理屈はいい。半世紀もつかどうか、そんなことは俺にはどうでもいいのだ。オリンピックで日本国民が恥をかくかどうか心配なのだ!」

関係各省・水資源開発公団・東京都水道局の幹部らは、可能な限り工期短縮を目指すことを申し合わせた。だが工事はすべて予定よりも遅く始まっており、大臣の意向が何であれ工期短縮は無理であろうとの憶測が大勢を占めた。

その後、事態は急変した。河野大臣の<鶴の一声>で、武蔵水路の通水式は8月25日が既定路線になってしまった。大臣の唐突な発言に、建設省はじめ関係各省や東京都の幹部は再び混迷に陥った。



突貫工事の続く武蔵水路（水資源機構資料より）



工事の心臓部の秋ヶ瀬取水堰（水資源機構資料より）

「異常事態と暫定通水」

翌8月、猛暑の東京都は45%の制限給水に踏み切った。入浴・洗濯が制限され、プールや水洗トイレは使用禁止となった。理髪店、クリーニング店、製氷会社、蕎麦屋、すし屋、肉屋などが休業に追い込まれた。衛生状態の悪化から食中毒も続出した。手術ができず、急患以外は休診するなど医療機関への影響も深刻だった。自衛隊が応援に出動する事態となり、2万5000人の隊員が16日間にわたり給水車215台を連日走らせて約7000立方メートルを給水した。警視庁や米軍による応援給水をはじめ神奈川県からの緊急分水(日量10万立方メートル)などの非常時対応が展開された。節水の呼びかけやプールの使用禁止、雨乞いや人工降雨実験…。

制限給水は一時、最大50%まで強化され、通算1259日(約3年半)にも及んで、都庁には都民から苦情が殺到した。マスコミでも連日大きく報道され、都政の無策が批判された。

オリンピック開始直前の8月、秋ヶ瀬取水堰が突貫工事の末、完成にこぎつけた。農業用水である見沼代用水を經由して利根川の水を荒川に導水し、さらに荒川の秋ヶ瀬取水堰を經由して、東京都や埼玉県の浄水場に上水道の原水を供給するとともに、隅田川に浄化用水を送るシステムがやっと実現した。9月10日、隅田川の蘇生を願って、荒川の水が新河岸川を経て隅田川へと流れ込んだ。河野大臣の「オリンピックまでに隅田川浄化を!」との厳命が達成された。大会開始の1か月前だった。東京オリンピック大会は、ぎりぎりのところで救われた。



東京オリンピック開会式(写真提供:共同通信社)



東京オリンピックは盛会のうちに幕を閉じた。翌昭和40年3月、武蔵水路は、見沼代用水の用水路を使いながら暫定通水を開始した。実際の工事完了は42年3月1日だった。念願のオリンピック大会には間に合わず、同大会から2年後だった。現場作業員はのべ43万7000人にのぼる人海作戦であった。

利根導水路事業と相まって、利根川上流には矢木沢ダムや下久保ダムなどの大ダムが計画・建設された。その後、奈良俣ダムなどが加わり、首都圏約3000万人の水を提供する一大水源池となった。湯水のリスク増大を最大限に抑止しながら、人口増加に対応し、産業を発展させる上で、ダム群の建設促進が重要な政策課題となった。

「平成の大改築事業」

東京オリンピックは戦後日本の発展ぶりを世界に示し、成功裡に終了した。だがオリンピックに間に合わせるため、突貫工事で造成された武蔵水路は半世紀を経て老朽化が進み、傷みが顕著になってきた。水路沿線の地盤沈下と水路自体が大きな課題になった。地盤沈下の影響による水路の沈下・変形、底板隆起や側面パネルの欠損などが発生し、本来ならば毎秒50立方メートルの導水機能を有していながら、毎秒40立方メートル以下の水しか導水できない機能不全に陥った。



現在の武蔵水路(水資源機構資料より)

耐震性の低下や不足も心配された。埼玉県内で予想される最大震度6強の揺れが生じると、水路や付帯施設に甚大な被害が発生する可能性があり、被災発生の場合、長期の通水不能や周辺地域への被害や影響が予想された。首都圏は機能マヒに陥る可能性も指摘された。

埼玉県内を走る武蔵水路は全面的改修が必要な時期を迎えていた。管理者である水資源開発公団は改築事業を立案し、最先端技術を駆使して全面的な改築工事に入った。平成27年(2015)に「平成の大改築事業」が無事完成した。

幹線水路は、従来の断面が逆台形のコンクリートライニング構造から、耐震性の高い断面が矩形の鉄筋コンクリートフルーム構造へと大規模な改築がほどこされた。新しく改築された区間は、中央に分離壁が設けられた水路が2本平行した構造になっている。維持管理を行う際に片方の水路のみを止水し、もう片方の水路は通水したままにしておくことで、メンテナンス中の通水を確保する。同時に、サイホンや水門の耐震工事、糠田排水機場のポンプ増強、管理設備の更新などが行われている。「平成の大改築事業」は、高度技術が評価され平成27年土木学会の技術賞(技術賞IIグループ)に輝いた。武蔵水路(14.5キロ)は東京への水の大動脈として今日も活躍しているのである。

参考文献：拙書『砂漠に川ながる、東京大湯水を救った500日』(ダイヤモンド社)、水資源機構資料、『ダムと緑のダム』(虫明功臣東大名誉教授ら監修)、筑波大学附属図書館資料。